新作能「犀龍小太郎」のクライマックス。
犀龍と小太郎が岩を砕くと現れる水の精

片山清司師らによる能楽「敦盛二段之舞」

野村万蔵師らによる狂言「蝸牛」

火入れ式では公募の前角さんのほか、各団体の代表が役を務めました

宝生欣哉師が扮する犀龍小太郎（写真左）と犀龍（写真右）

第18回 信州安曇野

薪能

甦った 犀川の伝説

今回の能「犀龍小太郎」は、ふるさとに語り継がれた民話がもととなった新作能です。耕す土地が少なく貧しい人々の暮らしを見かね、母の龍とともに岩を砕き、犀川を命がけで切り開いた小太郎の物語が演じられました。

犀川を渡る涼風がかがり火を揺らし、幽玄の世界を映し出します――。

恒例の信州安曇野薪能（同実行委員会主催）が８月23日、龍門渕公園多目的広場の特設能舞台で開かれました。今年は松本平誕生にまつわる民話をもとに青木道喜師が創作した安曇野薪能オリジナル作品「犀龍小太郎」、能楽「敦盛二段之舞」、狂言「蝸牛」が上演されました。全国から詰めかけた約９００人の観客は、静と動が織り成す情感あふれる世界に引き込まれていました。

名誉市民の故・青木祥二郎師の長男であり、新作能「犀龍小太郎」原作者の青木道喜師は、小太郎の母（犀龍）を演じました。

特設舞台の背に流れる犀川。心配されていた雨は開演前にあがり、雲から差し込む光が幻想的な雰囲気をさらに醸し出しました。

幽玄の世界を間近に体験

初の公募による火入れ役

前角 久美子さん（穂高）

今回は、初めての試みとして市民の皆さんを対象に「火入れ役」の募集が行われました。その結果、前角久美子さん（穂高）が当選。初代となるこの役を見事に務めました。前角さんは、「火入れの雰囲気は圧倒されました。少しずつ日が沈み、演者や観客、自然が一体となった空間が神秘的でした」と当日の様子を振り返りました。